

渡辺海旭の「共済」思想

—全体的・国民的事業としての社会事業—

東海学園大学 島田 肇 (2593)

キーワード：共済思想、社会事業、仏教社会事業

1. 研究目的

わが国の私的な社会福祉は、その多くが宗教家によって担われてきたと考えられている(吉田 1990:468)。社会福祉が、論理的にも倫理的にも、まだその線引きが混沌としている時期、要支援者(状態)にたいして、公的ではなく私的に、社会全体で救済することの必要性和重要性を唱えたのは宗教家渡辺海旭(以下、「渡辺」と言う)であった。その思想は倫理的使命観に満ち、一人の宗教家としての枠を超えるものがあつた。その理由は、渡辺の思想が、私的ではあるが国家的規模で全体的性格を持っていたからである。本研究では、渡辺がその実践の基本に据えた「共済」思想に主眼を置き、渡辺の取組んだ全体的・国民的事業としての社会事業について考察することを目的とする。本研究で云う「共済」と渡辺の云う社会事業とは、その意味するところは、ほとんど同じ内容ではないのかと云う仮設に立って論を進める。

2. 研究の視点および方法

本研究は、渡辺が生きた時代とその思想との関係性を比較検討する方法で行い、その際に参考とする資料は、基本的にはそれまでに出版された文献や論文等に依つた。

渡辺の共済思想は、その思想が誕生した社会的、時代的考察を抜きには考えられない。そこで本研究における視点は、渡辺の生誕から死に至るまでの時間軸を四つの時期に分け、渡辺の共済思想と社会について複眼的に概観する点に置いた。一つ目の時期は、渡辺の誕生(1872)からドイツ留学に出発する前年(1899)までの時期、二つ目の時期は、ドイツ留学の時期(1900-1910)、三つ目の時期は、ドイツ留学の帰国(1911)後から渡辺の独自の社会事業観が明確に現されたと考えられる「現代感化救済事業の五大方針」(1916)が発表されるまでの時期(1911-1916)、四つ目の時期は、以降、渡辺が共済思想を背景に社会的実践活動・教育活動を本格的に開始し、死(1933)に至るまでの時期(1917-1933)である。こうした時間的経緯を見ながら、共済思想が、社会からの影響力をどれだけ受け誕生して来ているのかについて考える。また渡辺が提唱した仏教徒社会事業は、宗教家であり社会事業家である渡辺が、仏教徒に向け発した国民全体的かつ社会的な救済事業実施への啓発的色彩を色濃く持つものである点、についても見ていきたい。

3. 倫理的配慮

本研究を進めるにあたって配慮した倫理的視点は、参考とする文献や論文、先行研究あるいはネット上の情報等を利用するにあたり、著作権の侵害、時代的齟齬の確認等に十分な注意を配った点にある。

4. 研究結果

1872-1899 のこの時期は、仏教徒渡辺海旭の誕生と「仏教清徒同志会」の発足の時期である。渡辺と社会との関係は、『浄土教報』主筆になったことで始まり、「仏教清徒同志会」発足に参加したことがその象徴的出来事になった。このとき、渡辺は、未だ仏教徒としての枠を出ることなく、社会にたいして(特に国家にたいして)一定の距離を保ちつつも、それまでの伝統仏教が他宗教への批判や国家との癒着という、宗教団体としてあるまじき言動を行っていたことへの反発の時期として捉えることが出来る。

1900-1910 年のこの時期は、渡辺がドイツ留学で知った社会問題と労働者による共済的相互扶助活動(共済思想)、そして日本の社会問題への仏教徒としての決意が行われた時期である。それは次のような経緯を踏む。一つ目は、留学先ドイツで知ったドイツ労働者が抱える社会問題とドイツ国内の貧困問題への知見であり、二つ目は、そうしたドイツ労働者の社会問題にたいするドイツ自由労働組合による共済的相互扶助活動の実態との直面、三つ目は、日本国内の労働(者)問題にたいする仏教徒としての決意を新たにしたこと、等である。

1911-1916 年のこの時期は、共済思想と社会事業が渡辺の中で思想的に関連づけられた時期である。渡辺がドイツ留学から帰国し、留学中に学んだドイツ社会の労働問題とそれにたいするドイツ社会の対応を日本国内の問題に照らし合わせることで、宗教が取り組まなければならない救済事業に目覚めた時期と考えられる。1911年の浄土宗労働共済会開所、1912年の仏教徒社会事業研究所発起、科学的社会事業を提示した論文「現代感化救済事業の五大方針」執筆等が、こうした渡辺のこの時期を象徴している出来事と思われる。

1917-1933 年のこの時期は、渡辺の仏教社会事業と仏教教育の啓蒙的实践の時である。これまでの仏教徒、仏教研究者としての立場を土台として、より広い視点から、これからの日本社会で果たさなければならない仏教徒による社会事業や仏教教育のために、啓発・啓蒙実践を積極的に行った時期である。

5. 考察

渡辺の共済思想にたいする諸学説の中には、「大乘仏教の自他不二の平等思想と衆生恩による報恩思想から生み出し、その当時の社会連帯思想に照らし、現代的に解釈して理論化した」(朴 1999:235)という考えや「渡辺海旭の仏教主義に基づく社会事業思想の中心をなす『共済主義』」(安藤 2000:138)という説がある。共済思想は、決して仏教による教えに基づいてのみ生み出された思想ではなく、むしろ社会との関係、言い換えるならば、渡辺自身の生活体験と社会で生きる人間が直面している問題(貧困問題や労働問題)やそれを抱え生きている生活者の生きるための思想であると考えられる。渡辺の共済思想は、宗教家渡辺が、国内で頻発した社会問題や労働(者)問題にたいし、その解明と解決に向け正面から対峙したところに生まれた思想である。その意味で渡辺の「共済」思想は、渡辺が唱えた「社会事業」とはその意味する内容はほぼ同じであると考えられる。